

『宇治拾遺物語』 「児ノカイ餅スルニ空寝シタル事」考

— 高等学校で学ぶ「古文」の教材を読む —

辻 陽 史
大 島 薫

はじめに

『宇治拾遺物語』に「児ノカイ餅スルニ空寝シタル事」と題される一話（以下、「児のそら寝」と称する）が収録されている。高等学校で学ぶ古文の入門教材として、数多くの文部省検定済教科書に採録される一話である。「児のそら寝」は『平成 24 年度使用教科書目録』（平成 23 年 4 月、文部科学省）に掲載されている「国語総合」の教科書 25 種類のうち 18 種類に、高等学校入学直後に学習する教材として採録されている。日本人にもっとも読まれている日本古典文学であるというだけでなく、学習者にとって「古典」という科目に親しむことができるか否か、そして、日本の古典文学に関心を持つことが出来るか否かという意味においても、その影響を推考させる一話なのである。平成 20 年 1 月 17 日に中央教育審議会より告示された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」には、国語科教育における「古典」の指導について「我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する」と明記している。「古典」への関心を引き出すために、「児のそら寝」を如何に指導するかが今後いっそう問われるわけである。ところが、現在の研究状況に照らしても、「児のそら寝」の解釈には通説をみない箇所が少なくない。高等学校入学直後に学習する教材として扱うには、十分な解釈が提示されているとは言い難いのである。それゆえに小稿では、『宇治拾遺物語』に収録される「児のそら寝」について、最新の研究成果も勘案しつつ、その解釈を新たに提示する。

「平成 17 年度教育課程実施状況調査（高等学校）」に拠れば、70 パーセント以上の生徒が「古典」を嫌っている。これまで以上に国際化する社会に生きる生徒たちが、母国の文化に関心を持っていないことに危惧を抱かざるを得ない。高等学校で

学ぶ古文の入門教材として「児のそら寝」を如何に読解するべきか、「古典」教育に資する解釈を提示するためにも考察を試みることにしたい。

1、新しい「高等学校学習指導要領」に告示された学習目標

まず、文部科学省が平成21年3月に告示した「高等学校学習指導要領」（以下「新学習指導要領」と称する）から、高等学校における「古典」教育の目標を確認する。教材を如何なる学習目標をもって指導するかが、「児のそら寝」を如何に解釈するかを考察するうえにも必要だからである。なお「新学習指導要領」は、前章に取り上げた「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」に基づいて作成されており、高等学校で学習する国語科科目として「国語総合」「国語表現」「現代文A」「現代文B」「古典A」「古典B」を定め、それぞれに「目標」「内容」「内容の取扱い」を告示する。古文の学習は、「国語総合」、「古典A」及び「古典B」において行われるわけである。「児のそら寝」を採録する「国語総合」の学習目標を、「新学習指導要領」は次のように記している。

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる

また同書を解説するために、文部科学省が平成22年6月に公開した『高等学校学習指導要領解説 国語編』（以下「新学習指導要領解説」と称する）には国語科教育として「国語総合」についても次のように記している。

現代社会においては、物事を的確に理解し判断する力、論理的に思考し表現する力、創造する力などを身に付けるとともに、我々の先人が築き上げてきた伝統と文化を尊重し、豊かな感性や情緒を備え、幅広い知識や教養をもつことが求められている。国語は、これらの様々な能力や心情などと大きくかかわるものであり、我が国の文化の基盤をなすものである。また、様々な学問や技術を学ぶにもその基礎となるのは国語であり、文化の継承と創造、日本人としてのアイデンティティーの確立にとっても欠くことができない。このような、自己の形成や相互の交流、社会的、文化的な活動の基盤となる国語についての能力や態度を育成する国語科の役割を踏まえ、「国語総合」は、教科の目標を全面的に受けた基本的な、すべての生徒に履修させる共通必修科目として設定した。小学校及び中学校国語と密接に関連し、その内容を発展させ、総合的な言語能

力を育成する科目として、選択科目や他の教科・科目等の学習の基本、とりわけ言語活動の充実に資する国語の能力、社会人として生活するために必要な国語の能力の基礎を確実に身に付けることをねらいとしている

「国語総合」は国語科教育における共通必修科目であり、「様々な言語活動を通して国語の能力を身に付けることができるよう、小学校及び中学校と同様に、「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」、「C 読むこと」及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の3領域1事項」をもって構成される。ちなみに「新学習指導要領解説」は、「古典」を学習する選択科目である「古典A」と「古典B」について、「国語総合」を構成する3領域1事項のうち、「C 読むこと」の古典の分野と〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕とを中心として、その内容を発展させた科目と性格付けている。また「新学習指導要領解説」は「A」を付した科目は、言語文化の理解を中心的なねらいとし、「B」を付した科目は、読む能力を育成することを中心的なねらいとしている」と説明するほか、それぞれの性格については次のように説明する。「新学習指導要領」に告示される「目標」とも引用したい。

・古典A

「新学習指導要領」古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる

「新学習指導要領解説」時代がいかに変わろうとも普遍的な教養があり、かつて教養の大部分は古典などの読書を通じて得られてきた。また、古典は文化と深く結び付き、文化の継承と創造に欠くことができないものである。「古典A」は、このような、文化の基盤としての古典の重要性を踏まえ（中略）、古典などを読んで、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成することをねらいとしている。そのため、小学校、中学校及び「国語総合」の指導との一貫性を図りながら、伝統的な言語文化に関する課題を設定して探究したり、言語文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について生徒に考えさせたりして、伝統的な言語文化を継承し、現代に生かすために、古典への興味・関心を広げることを重視している。このような学習によって、言語文化の継承と創造の担い手となる資質を育成する

・古典B

「新学習指導要領」古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの

見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる。

「新学習指導要領解説」いつの時代でも、伝統を継承しつつ新たな文化を創造していくことは大切なことであるが、知識とそれを活用することの重要性が増すこれからの社会においては、蓄積された様々な経験や知識などの「知」が継承され、新たな創造や工夫につながっていくことが一層求められる。「古典B」は、そのような状況を踏まえ（中略）、古典を読む能力を養うとともに、思考力を伸ばし、感性や情緒をはぐくみ、古典を通して人生を豊かにする態度を育成することをねらいとしている。そのため、「国語総合」における古典に関する指導が、総合的な言語能力を育成する指導の一環として行われ、「古典A」における指導が、特定の文章や作品、文種や形態などについてまとまりのあるものを中心として行われるのに対して、「古典B」では、ある程度幅広く古典を取り上げ、かつ言語文化の変遷について理解を深めることとしている（中略）「古典B」において様々な教材を系統的に取り上げ、ある程度幅広く指導することは、古典を読む能力を養い、古典についての理解や関心を深める上で効果的であるとともに、古典の価値について考えを深め、我が国の文化の特質、我が国の文化と中国の文化との関係などについて考える上でも有効である。さらに、「古典B」の指導は、将来にわたって古典を主体的に学ぶ基礎を培うという重要な役割も担っている。

「古典A」において「古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」と、「古典B」において「ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる」と説明されていることに注目するとすれば、「古典（古文）」教育の学習目標は、学習者に日本を再認識させ、現代社会において「ものの見方、感じ方、考え方」を再検討させることにある。そして「国語総合」における「古典（古文）」教育も、この教育目標を達成する基礎力と育成するために「古典（古文）を読む能力」「古典に親しむ態度」を養うものということになろう。

2、高等学校における「児のそら寝」の学習指導

ところで「児のそら寝」は、平成24年度入学生まで通用される平成11年3月に

告示された『高等学校学習指導要領』（以下「学習指導要領」と称する）において「読むこと」と「言語事項」を学習する教材として扱われてきた。「旧学習指導要領」には「国語総合」における「読むこと」について「ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと」と、「言語事項」について「エ 文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること」と記されており、その解説として平成11年12月に公開された『高等学校学習指導要領解説 国語編』（以下「学習指導要領解説」と称す）には、それぞれについて次のように解説されていた。

- 「読むこと」主として文学的な文章を読み味わうことに関する指導事項（中略）人物（だれが）、事件（何を、どうした）、背景（いつ、どこで）をきちんと把握する必要がある。特に「人物」に関しては、その行動や性格はもとより、その人物のものの考え方、生き方、人物相互の関係などを的確にとらえて読むことが必要である。「情景」とは、その作品に描かれている場面や自然の風景を指すが、これを把握することは登場人物の言動の根底を探る上で重要な要素である。「心情」とは、登場人物の心的状況を指す。登場人物の「心情」を理解し考察することによって自らの生き方と重ね合わせ、登場人物に対し、共感したり反発したりする中から、生徒の豊かな心情や感性などが養われていく
- 「言語事項」文語文法のほか、歴史的仮名遣いなども含まれる。特に現代語と異なる古文特有のきまりに重点を置いて、仮名遣いや活用の違い、主な助詞、助動詞等の意味、用法、係り結び、敬語法の大体などについて指導し、古文を読むことの学習に役立つように指導する

「児のそら寝」を採録する、これまで出版されてきた「国語総合」の教科書には、たとえば次に引用する筑摩書房『精選国語総合 改訂版』のような、「読むこと」と「言語事項」を学習するための設問が加えられていた。

- 1、次のことばの意味を、現代語訳で確かめよう。また、辞書でも調べてみよう。a つれづれ b おどろく c いらふ d 念ず
- 2、「児」が心の中で思っている部分を、本文中からすべて抜き出してみよう。
- 3、この話のおもしろさはどのような点にあるか、考えてみよう。

もちろん、おのおのの教科書に付属する教師用指導書にも、「児のそら寝」を教材として「読むこと」と「言語事項」を学習する要点を説明しており、たとえば筑摩書房版教科書に付属する教師用指導書には、「児のそら寝」が入門教材であることを明記したうえで、「児の内面に視点を置いて場面を進行させていく語りの巧みに説話らしい魅力が味わえる」と説明し、指導目標として「古文に親しむとともに説話の

語り口を読み味わう」と挙げている。そのほかにも、第一学習社『高等学校新訂国語総合 古典編』の教師用指導書には、

- ①平易で興味深い説話に接することによって、古文に対する親近感をもたせ、古文のもつ特徴に慣れさせる
- ②歴史的仮名遣いの用例に接して、その用いられ方や、現代の発音・仮名遣いとの違いに慣れさせる
- ③基本的な古語について指摘し、その意味や使い方について把握させるとともに、慣用的な語句について理解させる
- ④文法については、歴史的仮名遣いとの関連のもとに、品詞の種類を中心に、活用の初歩的な概念と、助動詞などの多義的用法についての基礎的な知識を与えておく
- ⑤古典の世界に生きる人々の心情や生活と、現代の生活感情や社会とを比較対照し、その共感や違和感の内容・条件などについて考えさせる

以上5点（「読むこと」①⑤、「言語事項」②③④）を指導目標として列挙しており、大修館書店『新編国語総合改訂版』の教師用指導書には「子供の幼い心情と行為を扱った小品ながらも、人間心理を深い所で捉え、それをユーモラスに描いてみせた文学性を味わうことを目標にしたい」と説明したうえで、具体的に「①大意把握・重要語句・全文読解・全文朗読」「②児の心情と行動・僧たちの対応」「③品詞・用言の活用・係り結び」の3点を挙げて、いずれの教科書ならびに教師用指導書も「学習指導要領」ならびに「学習指導要領解説」に解説する「読むこと」と「言語事項」の達成を目指して、「児のそら寝」を指導する要点を提示することを確認できよう。

ただし「児のそら寝」の場合、文語で記された本文を現代語に逐語訳するだけでは、上記とくに「読むこと」を目指した学習目標を達成することは難しかった。「読むこと」とは「人物（だれが）、事件（何を、どうした）、背景（いつ、どこで）」つまり物語を構成する5W1Hを把握したうえで、登場人物や情景を読み取り、登場人物の心情を理解し、学習者自身の「生き方と重ね合わせ、登場人物に対し、共感したり反発したりする中から、生徒の豊かな心情や感性」を養うことを目標とする学習だからである。そこで次に「児のそら寝」の本文を引用しつつ、「読むこと」を目指した学習目標を達成し難い状況であったことを確認しておきたい（引用は、第一学習社版に掲載される本文に拠る）。

今は昔、比叡の山に児ありけり。僧たち、宵のつれづれに、「いざ、かいもちひせん。」と言ひけるを、この児、心よせに聞きけり。さりとて、し出ださんを待

ちて寝ざらんも、わろかりなと思ひて、片方に寄りて、寝たるよしにて、出で来るを待ちけるに、すでにし出だしたるさまにて、ひしめき合ひたり。この児、さだめておどろかさんずらんと、待ちゐたるに、僧の、「もの申し候はん。おどろかせたまへ。」と言ふを、うれしとは思へども、ただ一度にいらへんも、待ちけるかともぞ思ふとて、いま一声呼ばれていらへんと、念じて寝たるほどに、「や、な起こしたてまつりそ。をさなき人は、寝入りたまひにけり。」と言ふ声のしければ、あな、わびしと思ひて、いま一度起こせかしと、思ひ寝に聞けば、ひしひしと、ただ食ひに食ふ音のしければ、ずちなくて、無期ののちに、「えい。」といらへたりければ、僧たち笑ふこと限りなし。

- 人物 (だれが) 「児」「僧たち」
- 事件 (何を、どうした) 「稚児が僧たちに笑われた」
 - 冒頭→発端→山場・展開→クライマックス (転換) →結末
 - 伏線・葛藤・クライマックス・カストロフィー

(冒頭) 今は昔、比叡の山に稚児がいた

(発端・伏線) 僧たちが宵の退屈しのぎに「さあ、かもちいを作ろう」と言ったのを、この稚児は期待をもって聞いた。かといって、作り上げるのを待つて寝ないのも、みっともないだろうと思って、片隅に寄りて、寝たふりをして、出来上がるのを待っていた

(山場・葛藤) もう出来上がったようで、ひしめき合っている。稚児は、きつと起こそうとするだろうと、待っていると、僧が、「もしもし、目をお覚ましなされませ。」と言うのを、うれしいとは思うが、ただ一度で返事をするのも、待っていたのかとも思われるだろうと思って、もう一度呼ばれてから返事をしようと、我慢して寝ている

(クライマックス) 「おい、お起こし申し上げるな。幼い人は、寝入ってしまったわれた。」と言う声があったので、ああ、困ったと思って、もう一度起こしてくれと、思って寝て聞くと、ひしひしと、ただ食いに食う音があったので、どうしようもなくて、長い時間の後に、「はい。」と返事をした

(結末・カストロフィー) 僧たちが笑うことは際限ない

- 背景 (いつ、どこで) 「今は昔」「比叡の山」「宵」

「人物」や「情景」を読み取り、「人物の心情」を理解するために必要な情報が、「児のそら寝」の本文には十分に表現されていない。「結末」として記される「僧たちの笑い」にしても、上記のように本文を現代語に逐語訳するだけでは、「稚児は寝たふ

りをしていたが、食欲に負けて返事をしたから」と説明するしかないだろう。「児のそら寝」の本文には、「僧たち」が「児」に敬語を使用していることや、「児」の耳に聞こえた音（情態）を「ひしめき（く）」「ひしひしと」という言葉をもって表現することなど、この一話に特徴的な表現を確認することができる。しかし、この一話の背景としてある「比叡山延暦寺における仏教修行者たちの生活と、彼らの価値観」を踏まえて解釈しない限り、こういった特徴的な表現が何故に使用されているかが解釈できない。現代社会に生きる読者が、自らが生きる時代の価値観をもって読解するほかに、さらには、この一話の「面白さ」を読み取ることも難しい状況であると言うほかない。しかし、異なった価値観において生活する「人物」を、自らの価値観において解釈しようとするのは、前章に確認したような高等学校において古典（古文）を学習する目標に照らしても回避すべきだろう。「児のそら寝」を解釈するには、この一話の本文に記述されていない、作品が形成された時代の諸相、現在では失われてしまった種々の価値観など勘案する必要がある。

3、「児のそら寝」の解釈

「児のそら寝」を解釈するには、この一話が形成された時代（『宇治拾遺物語』については、おおむね13世紀中頃までに成立したとされている）の諸相、さらには寺院における日常的な生活の実態など勘案する必要がある。そこで本章では、この一話の本文に表現されていない、けれども作品が形成された時期に読者が共有していたであろう状況など踏まえつつ、「児のそら寝」の解釈を提示する。

まず、この一話の「背景（いつ、どこで）」について考察する。本文を現代語に逐語訳するだけでは、「児のそら寝」は「比叡の山」つまり日本天台における聖地であった「比叡山延暦寺」において「日没後から就寝するまでの時間」に起きた出来事としか説明できない。「比叡の山」については、これまで出版されてきた教科書にも「京都府と滋賀県との境にある比叡山。ここは、その山上にある延暦寺をさす（第一学習社版）」という語注が加えられている。しかし比叡山延暦寺には、数多い諸堂と、さまざまな目的で使用された建造物が建ち並んでいる。この一話の本文には、具体的な場所を決定するために必要な情報が記述されておらず、「児」が就寝する空間で起こった出来事であると読み取らせるのみである。ただし、「児」が就寝する空間を寺院建築史に照らして考証するとすれば、寺院建築（伽藍）のなかでも日常的な生活空間としてあった「僧房」における出来事であると指摘させるのである。「児

のそら寝」を解釈するために必要であるのは「延暦寺をはじめとする寺院に日々を送る者たちの日没後から就寝時までの生活」ということになろう。なお、山岸常人は『中世寺院の僧团・法会・文書』（東京大学出版会、2004年）に「中世寺院の生活史研究」の一環として、僧房における生活の実態や規範について明らかにしており、平安時代から鎌倉時代にかけては「伽藍僧房」に止住することが基本的には原則であったが、寺内周辺や寺外に居住する僧侶が増大したことで、さまざまな種類の僧房（「院家・子院僧坊」「堂院僧房」など）が存在するに至ったことなど指摘している。また「僧房」の居住者あるいは宿泊に関する制限が、僧房における秩序を乱す存在として「女人」とともに「児」にも及んでいたことが、「禪林寺式（貞観10年（868））」「天禄元年（970）十月十六日天台良源起請」「嘉禎三年（1237）十一月二日宗性起請条条」などに確認できる。「児のそら寝」の一話が、比叡山延暦寺における如何なる生活空間において起こった出来事であるか、その詳細を明らかにすることは不可能であると言うしかない。しかし、山岸は上記著作において、日本の中世寺院における仏道修行者たちの生活の実態に関して「再現が可能か否かを考えた時、絵巻物などの絵画史料が豊富に現存するとはいえ、心許ないものがある（中略）しかし中世の宗教施設、即ち寺院・神社の実態を克服に再現すべく、中世寺院の包括的なあり方を解明することは、歴史学の使命の一つであろう」と述べており、寺院社会生活史を明かにするために「従来の宗教史や歴史学の範疇に限定されず、宗教学・芸能史・文学・建築史・美術史・民俗学など関連分野の成果の相互活用の必要性を促す」と加えている。「児のそら寝」が、比叡山延暦寺における、とある「僧房（日常的な生活空間）」で「日没後から就寝に至るまで」に起こった出来事を記述しているという意味において、山岸が指摘するような興味を抱かせる一話であることは間違いない。「児のそら寝」を学ぶ「面白さ」とは、この一話の「物語性」や、登場人物たちの「心情」を読み解くばかりでなく、日本の古典文学が日本文化さらには歴史学を解明するために重要な情報を伝える資料であると実感し得ることにもある。

ところで『宇治拾遺物語』が成立したのとはほぼ同じ時期に活躍した法相宗の学僧、解脱房貞慶（1155～1213）が著した『勸学記』には、学問を専らにする学僧たちが仏教教義などを習得するために1日に14時間ほど費やしていたことを確認できる。彼らの学問は勤行を終えた後、日没後にも及んでおり、学僧たちの「日没後から就寝するまでの生活」を髣髴させるのである。「児のそら寝」に登場する「僧たち」が日没後から就寝するまでに「かいもちひ」を調理し、それを食べるという行

為に及んでいることと比較すれば、上記の学僧と「児のそら寝」に登場する「僧たち」との間に、寺院における立場の相違があることも指摘できよう。残念ながら、これまで出版されてきた教科書には、「児のそら寝」に登場する「僧たち」について解説されていない。わずかに大修館書店版の教師用指導書のように、「日没後」に「かいもちひ」を作る「僧たち」の行動を解釈するために、次のように説明されるのみである。

日没から夜中になるまでの時間帯、当時の僧の食事は正午前にとられ、それ以降はとらないのが普通だった

仏道修行者の生活は、「戒律」と呼ばれる規範によって定められていた。「戒律」に従うとすれば、「日没後」は食物を口にしてはいけない時間帯だったのである。また「食欲」は「三毒」に含まれ、仏道修行者が克服すべき「欲」の一つでもある。この一話に登場する「僧たち」や「児」は「食欲」に負けてもいる。「児のそら寝」は、本来ならば口外し難い行為を記述した一話であったわけである。ところが、「児のそら寝」に登場する「僧たち」には、「日没後」は食物を口にした以外にも、「戒律」を違える行為を二つ指摘することができる。すなわち「僧たち」が自ら「かいもちひ」を作ったことと、「そら寝する児」に聞こえるほどに「ひしひし」という音をたてて「かいもちひ」食らったことである。「戒律」には、仏道修行者が自ら食する物を調理することや、食事中に音をたてることが禁止されている。この一話に登場する「僧たち」は、『勸学記』に確認されるような、真摯に仏道修行に勤しむ僧侶たちではない。そしてとくに、この「僧たち」が自ら食べる物を調理していることに、彼らが「比叡の山」で如何なる役割を担う階層であったか推考させるのである。比叡山延暦寺における僧侶たちの階層については、尾上寛仲「中世期比叡山の階級制度」(『印度学仏教学研究』10-1・11-2、1962年1月・1963年3月)に考察されている。尾上は『天台座主記』に「一山僧侶ノ階班(比叡山延暦寺における階層)」を「三等」すなわち「上方」「中方」「下僧」に区分することなど指摘して、またそれぞれにおける職掌、さらには各各の出自など明かにしている。「児のそら寝」に登場する「僧たち」は、これら三つの階層のうち「下僧」であった可能性が高く、「上方」や「中方」の僧に仕え、日常の雑役を担う僧たちであったと推考し得るのである。そして、寺院において学問を専らにする僧侶(「学生」「学侶」「学僧」と称された)とは別の、日常の雑務を担当する下位の職能集団に属していたからこそ、「日没後」に自ら食する「かいもちひ」を調理することも可能であったと考える。『宇治拾遺物語』が編纂されたのはほぼ同時期、日本に曹洞禅をもたらした道元(1200～1253)

は、入宋中に会った高僧たちが料理をたしなんでいたことへの驚きを、自らの著作である『正法眼蔵』に記述している。鎌倉時代初期、道元は比叡山延暦寺で仏教を学んでいる。延暦寺において、自ら食する物を調理するという行為が、僧侶にとって如何なる理解をもって認識されていたかを推量させるのである。

一方、「児のそら寝」に登場する「児」とは如何なる「人物」だろうか。まず教科書には「児」について、次のように説明している。

- 公家・武家などの子弟で、寺社で雑務をする少年（第一学習社）
- 貴族・武家の出身で、学問や行儀見習いのために預けられた少年（筑摩書房）
- 寺に預けられた公家・武家などの少年（大修館書店）

「児のそら寝」に登場する「児」について、「公家（貴族）」「武家」出身の、比較的出自の良い稚児を想定するのである。出自の良い稚児であるために、「し出ださんを待ちて寝ざらんも、わろかりなと思ひて、片方に寄りて、寝たるよしにて、出で来るを待ちける」、「ただ一度にいらへんも、待ちけるかともぞ思ふとて、いま一声呼ばれていらへん」と「体面を保とうという駆引き（新編日本古典文字全集本の頭注に拠る）」に及んだと読み解くのだろう。しかし、近年の研究成果を勘案すれば、寺院に出仕する児（稚児）と総称された「童たち」の階層さらには職業についても、土谷恵『中世寺院の社会と芸能』（吉川弘文館、2001年）に詳細である。土谷は、『宇治拾遺物語』をはじめとして「説話」に数多く登場している児（稚児）について「必ずしも（寺院に仕える）童の階層を示す呼称として厳密に使われているわけではない」と指摘するが、「兒（児）」「中童子」「大童子」を称された児（稚児）たちについて、寺院史料に依拠しつつ、次のように考究している。

中世前期の寺院における兒とは、房内の特定の階層の子どもをさす呼称であり、従来使われてきたように、寺院の子どもを漠然とさす語ではなかった。児の階層は仁和寺御室の例でいえば、上には清華家の子孫、中間には御室の房官の子、下には御室の侍の子や院の北北面の子がいた。その下限は六位あたりの子とみられる。兒には様々な役があったが、中でも房官の子の兒が中心となって行列の上童をはじめ御室の身邊の種々の雑事をつとめた。その中には御室の寵童となるものもいた。中童子は「童部」ともよばれて、兒とは出身階層を異にしるとみられる房内の子どもである。中童子は供奉と陪膳を主な役割とする上仕えの童であった。中童子には行列を飾る役や陪膳にみる接客、（中略）兒と共通した役もあったが、兒と中童子では接する客の身分や祇候する場が異なるのであり、両者の間には明確な身分差があった。大童子は中童子に比べると多様な役

を担う下仕えの童たちであった。大童子と中童子は従来いわれてきたように年齢による分類ではない（中略）中童子と大童子も階層による童の分類だったのである。公家新制の中で大童子は諸家の雑色に対応し、その装束や役割からも大童子は貴族社会の雑色に近い存在だったとみられた。中童子・大童子の役割の本質は僧の供奉にあったとみられ、僧を囲む童姿は仏の眷属の聖なる童に由来し、かつ僧尼令の侍の童子を起源とするとみられる。侍の童子が十世紀末から十一世紀の僧侶の階層分化に伴って兒・中童子・大童子に階層分化していった

兒（稚兒）たちも出自により階層が区分され、それぞれに異なった職掌を担っていたのである。「兒のそら寝」に登場する「兒」の階層は、この「兒」が「日没後」を過ごす生活空間において、「下僧」が「かいもちひ」を食する音や、「下僧」の声を耳にしていることを根拠とすれば、出自の良い「上童」でなく、日常において「下僧」と接触する「中童子」あるいは「大童子」である可能性を指摘させる。この一話の背景には、現代の日本では実感できない身分社会が存在している。つまり、この一話に登場する「僧たち」が「兒」に対して「もの申し候はん。おどろかせたまへ。」「や、な起こしたてまつりそ。をさなき人は、寝入りたまひにけり。」といった敬語を用いていることも、寺院内部における階層差に由来する。この一話に登場する「僧たち」と「兒」との人間関係とは、「兒」に敬語を使用しなければならない立場にある「僧たち」、けれども生活空間を同じくすることから出自における大きな身分差を感じられない両者、という程度に指摘することになろう。そして、こういった人間関係を背景として、この一話の「結末（カタストロフィー）」に「僧たち笑ふこと限りなし」と記述されている意味を考察するべきなのである。

ところで、この一話における「事件（何を、どうした）」を読み解くには、着意すべきことがある。「そら寝する兒」の聴覚をもって、この一話における物語が進行していることである。「そら寝する兒」が耳にした「声」と「音」を表現し、その聴覚情報から「兒」が判断した状況と、その状況に所以する「兒」の心情を記述しているからである。とすれば、この一話には、「僧たち」が「かいもちひ」を作る姿を描写する必要はなかったと考えられよう。もちろん、「かいもちひ」を作る「僧たち」の姿（場所や状況）、さらにいえば「僧たち」の心情を、「兒」の脳裏に浮かんだところや、「兒」が感じたところとして解釈を加えることは可能である。しかし読者は「兒のそら寝」を解釈するにあたって、上記のような「兒」の聴覚を越えた情報が、そもそも記述されていないことを認識しておくべきである。そして前章に指

摘した「ひしめき(く)」あるいは「ひしひしと」という言葉は、「児」が耳にした音(情態)を表現するために必要な、この一話に特徴的な言葉であったわけである。なお、蜂矢真郷「メク型動詞と重複情態副詞」(『国語語彙史の研究』7、和泉書院、1986年)は動詞化接尾辞メクを伴う動詞と重複情態副詞との対応関係を考察するだけでなく、「中古から中世にかけて、語基が名詞のものが多いたるところから語基が形状言のものが多いたるところへ変遷している(中略)語基が形状言のものの造語力が院政期以降強かったところへの変遷としてとらえられる」と言及する。「ひしめく」(動詞化接尾辞メクを伴う動詞)と「ひしひしと」(重複情態副詞)についても、蜂矢論文が考察する対応関係にあり、「語基が形状言のものの造語力」の強化と増加を裏付ける例となろう。「児のそら寝」の「面白さ」とは、こういった言葉を使用する必然性にもある。そして、その必然性によって、時代時代に新たな言葉が造語されていたことも注目に価する。小峰和明は『宇治拾遺物語の表現時空』(若草書房、1999年)に、「ひしめく」という言葉が院政期から中世にかけて頻出する中世語であることを前提として、この言葉を使用する背景に「集団や群衆へのまなごし」を指摘し、「群衆の動きそのものはいつの時代にもあるにせよ、それを凝視し、積極的に表現世界にとりこんでいくところに中世の特徴があろう」と、『宇治拾遺物語』に表現される中世的な世界を読み解いている。作品に使用された言葉から「時代」を読み解くこと、さらには、「時代」に要請された「造語」を確認することによって、「児のそら寝」に限らず、日本の古典文学を学ぶ意義を意識させる手がかりを与えることも可能になろう。日本の古典文学を何故に学習するのか。現代語に逐語訳するだけでは、その意義を説明することは難しい。しかし「児のそら寝」は、上記のような日本語学(国語学)における見地からも作品解釈を展開することができる。「古典」を学習する入門教材として、適切な一話であると指摘することができるだろう。

むすびにかえて

ところで教師用指導書には、寺院に出仕する児(稚児)について「男色」の対象であったことを加えて、次のように説明している。

稚児。寺院や公家・武家などに召し使われていた少年。比叡山のような場合、貴族の子弟とか在俗の信心者の子弟などが、仏教や一般的学問の修行のため、児として入山していることも多かった。もともとは堂上家の子弟を児として剃髪させ、のちは修行を重ねさせた上で高位の僧階を与えていくものであったよ

うだが、世が下るにつれ、叡山三塔十六谷の多くの僧房では常人の子弟を児として蓄えるようになり、美少年を諸方に求めることとなった。そしてさらに堂衆輩も児・小人を引きつれるようになり、児は僧たちの男色の対象として見られるのが普通となった。こうしたことから、寺院・公家・武家に限らず、男色の対象とされる少年のことを「児」「稚児」「稚児若衆」などと一般に呼ぶのである。『宇治拾遺物語』などに登場する児に対して、法師たちが敬語を用いることや、年少の児が法師たちに対してせいっぱいの優雅さを装うのはこのためであり、また、児の失策が笑いの対象となるのも、多くは、児のみせかけの風雅や法師のロマンチックな期待が破られ裏切られた場合であるのもこのためである（第一学習社）

さらに、大修館書店版の教師用指導書のように「児のそら寝」に登場する「僧たち」と「児」とに「男色関係」があったことを積極的に指摘するものもある。教師用指導書の説明は、『日本の古典文学叢書』に提示された解釈に基づいている。「児のそら寝」に登場する「僧たち」と「児」とに「男色関係」を指摘する、小学館から1996年に出版された新編日本古典文学全集『宇治拾遺物語』には、次のように説明されている。

丁重すぎる僧たちの言葉遣いに対応ぶりの理由はなにか。少年が貴族の子弟であったためとする見方もあるが、それでは、次話の場合（農村出の少年への僧の丁寧な言葉遣い）の説明はできない。『徒然草』第五四段「御室に、いみじき児の」にうかがわれるような稚児愛的な状況を想定してみるべきではなかろうか

「僧たち」が「児」に丁重すぎる言葉をもって対応することから、「児のそら寝」も「稚児への愛」を描いた作品であると読み解くわけである。しかし「児のそら寝」に「稚児への愛」を読み取ることは、前章に指摘したような、この一話が「そら寝する児」の聴覚をもって物語を進行させていること、あくまでも「そら寝する児」が耳にした「声」と「音」を表現し、その聴覚情報から「児」が判断した状況と、その状況に所以する「児」の心情を記述していることを根拠とすれば、否定されるべきだろう。この一話において、「男色関係」にある「僧たち」であると「児」に意識されているとは読み解けないからである。もちろん「僧たち」に下心があったとしても、この一話には表現されるべくもない。中世寺院を舞台とする僧と児（稚児）との恋物語は、中世に流行した「児（稚児）物語」として現存している。またその題材となった、寺院内部に「男色」が横行していたという事実も否定できない。しか

し、「児のそら寝」を解釈するにあたって「男色関係」にあったことを踏まえる必要はないと考えられるのである。また「児のそら寝」さらには「田舎児桜ノ散ヲ見泣事」（「児のそら寝」に続いて『宇治拾遺物語』に収載される「僧」と「児」が登場する一話）に用いられる「丁重すぎる僧たちの言葉遣い」にしても、「男色関係」を想定する必要はないだろう。「田舎ノ児、桜ノ散ルヲ見テ泣ク事」において、僧が「田舎の児」に対して敬語を用いているのは、泣いている児に対する配慮を表現しようとした、いわゆる待遇表現であったと考えられるからである。

前章に指摘したように、「児のそら寝」は日本文学に限らず、歴史学や日本語学（国語学）といった種々の学問領域に資する一話である。日本の古典文学を学習する意義を意識させるためにも、適切な教材であると指摘できよう。また、この一話の「面白さ」は、前章に指摘した以外にも提示することが可能である。「児のそら寝」には、本来ならば口外し難い行為が記述されているからである。『宇治拾遺物語』には「児のそら寝」のほかにも「或僧人ノ許ニテ氷魚盗食タル事」など、仏道修行者が「食欲」に負ける話を収載している。平安時代末期以降に編纂される「説話集」と総称された作品には「破戒」する仏道修行者を記述する話が珍しくない。本来あってはならない話である。しかし公然と記述され、「説話集」に収載されたのである。「児のそら寝」の一話における「面白さ」とは、禁忌を公然と記録し、また禁忌を目撃しても「笑う」、中世における日本人の精神性を読み解くことにもある。寺院において仏道修行を専らにした高僧たち、日本仏教の教祖となった名立たる僧たちのような特別な高僧でなく、寺院において下位の職能集団に属した人々をも描き出しているのが、「説話集」と総称された作品の特徴でもある。さまざまな階層の人々が登場し、そういった人々の視点をもって描き出されることにこそ、時代の諸相を読み取らせるのである。そして、時代の推移とともに変化していった、日本人の意識そして精神を読み解く「面白さ」も、「児のそら寝」を学習する意義として指摘できるのである。

もちろん「児のそら寝」の本文には、小稿に取り上げた以外にも「かいもちひ」の実態など、いまだ不明と言わざるを得ない箇所もある。「かいもちひ」については、食物史を含めて、日本人の生活史に関する研究成果を待つしかないが、この一話について、今後さらなる解釈を可能にすることを指摘させるのである。しかし、いずれにしても、「日本の古典文学叢書」を参照しつつ、教科書及び教師用指導書は編纂されている。「新学習指導要領」ならびに「新学習指導要領解説」に告示される

「古典」を学習する「目標」を達成するためには、最新の研究成果を集大成する「日本の古典文学叢書」が必要なのである。高等学校における「古典」教育を目指すためにも、最新の研究成果、種々の学問領域における成果を踏まえた解釈を提示する「日本の古典文学叢書」の編纂と、それを随時改訂する出版事業が不可欠であることは間違いない。ちなみに、前章に引用した「児のそら寝」の本文は第一学習社版に拠っている。岩波書店から1990年に出版された新日本古典文学大系『宇治拾遺物語 古本説話集』を底本として校訂された本文である。「出来る」「待ける」「し出たる」「定て」「申」「寝入給にけり」「思寝」といった語句に活用語尾を記すほか、文部省教科書局調査課国語調査室が作成した「くぎり符号の使ひ方〔句読法〕(案)」(昭和21年3月)に基づいて校訂されている。「くぎり符号の使ひ方〔句読法〕(案)」には「文部省で編修又は作成する各種の教科書や文書などの国語の表記法を統一し、その基準を示すために編纂した四編の冊子のうちの一編」であり「この案は、発表以来半世紀を経っていますが、現在でも公用文、学校教育その他で参考にされています」という説明が加えられている。教科書に掲載される本文は、新日本古典文学大系や新編日本古典全集など「日本の古典文学叢書」を底本とする。しかし数多く出版されている「日本の古典文学叢書」から、そのまま掲載するのではなく、教科書用に校訂した本文を掲載するというのが現状である。日本の古典文学に親しむためには、高等学校で教材として扱うことが可能な「日本の古典文学叢書」、つまり古典テキストを翻刻しただけでなく、教科書と同様に校訂した本文をもって出版された「日本の古典文学叢書」が必要であろう。そして、そういった「日本の古典文学叢書」によって、古典(古文)教育の充実は言うに及ばず、日本の古典文学の読者層が拡大するであろうことも指摘しておきたいと思う。

〔付記〕高等学校や中学校で教鞭をとる卒業生たちから「古典を読む(解釈すること)の難しさが、教師になって初めて理解できた」という声があがったことから、せめて教科書に採録される作品だけでも読み直そうと、定期的に勉強会を開くことになった。小稿は、その成果を問うために、1章・2章と「むすびにかえて」を辻が、「はじめに」と3章を大島がまとめたものである。

(つじ ようじ／本学大学院生)

(おおしま かおる／本学教授)